

頭集
巻特

私の Mastery for Service

あの人も この人も関学だった

関西学院のスクールモットー——Mastery for Service
「卒業してから何年も経つというのに、むしろ学生時代よりも強くMastery for Serviceの深さと高さに打たれることが多くなった」最近そんな声をよく耳にします。あなたにとってMastery for Serviceとは何でしょうか？各界で活躍されている16名の方にうかがってみました。

各界の同窓生16人に聞く

地域との共生

株式会社阪急阪神百貨店

代表取締役社長 新田 信昭 (S45大経)



社会の成熟化が進み、個人のライフスタイルが多様化、個性化する一方で、業種業態を超えた競争の激化や業界の再編など、百貨店を取りまく環境は大きく変化しようとしています。それに加え昨年9月のリーマンショック以降、月を追うことに環境は悪化、厳しい局面が続くことが予想されます。しかしながら、いかなる状況においても百貨店業の存在基盤と使命を忘れてはならないと思います。

お客様あつての百貨店、当社の創業時からの社訓に「吾々の受くる幸福はお客様の賜なり」があります。又企業理念は「地域住民へ生活モデルの提供を通じて地域社会になくしてはならない存在であり続けること」です。今、建て替え工事をしております「阪急新本店」も、先にオープンした母校の足もとの「西宮阪急」も理念の「地域住民（お客様）とともに共生と進歩」の具現化であり、その成果が「お客様からの吾々の受くる幸福」だと考えています。

この理念の実践こそが、私達の企業の、社会に対する「Mastery for Service」ではないかと感じております。

ファッションを通して感動を

LVMHウオッチ・ジュエリー・ジャポン
フレッドパリ本社特別顧問
エファアップ・ジャポン特別顧問

谷口 久美 (S45大文)



33年前、フランスのオートクチュールのメゾン、クリスチャン デイオールの日本における初代駐在員としてファッション界でスタートを切って以来、世界の一流ブランドのコングロマリット、LVMH モエ ヘネシー・ルイ ヴィトングループで長年ファッションビジネスに携わり、かけがえのない数多くの経験や体験に恵まれました。その間いかに顧客に夢と感動を届けられるかを絶えず考え続けてきたわけですが、なかでも私が1986年、東京デイズニールランドで企画したデイオールのファッションショーは今尚、業界で語り継がれているほど、強烈なインパクトを与えたイヴェントでした。御伽の国に迷い込んだような美しいフィナーレに涙する女性達を目にしたとき、人を喜ばせることに深い感動を覚えました。

10年前からたしなんでいる声楽を本格的に勉強し直し、女声合唱団を結成し、合唱をバックにオペラの名曲を歌うお仲間が集う数々の演奏会を企画しながら、多くの方々と歌う喜びを分かち合っています。「谷口さんのお蔭で生きがいを見つけました」「こんなに楽しい世界があったなんて」と喜んでいただく度に幸せを感じます。

リタイアをし、自由になった今年は、1月に銀座の王子ホールでチャリティコンサートを初めて開催しました。関西学院の建学の精神である「Mastery for Service」の精神が私の人生の随所に活かされていたことを改めて実感しています。

大空を舞う

株式会社日本航空インターナショナル
ボーイング767副操縦士 立川 円 (H12大文)



「あの巨大な飛行機を操って、世界中を飛び回りたい・・・」そんな空への憧れに心を奪われ、勤務していた会社を辞めて、航空大学の扉を叩いたのは24歳の時でした。大学での専攻やそれまでの生活とは全く違うパイロットの世界。教官、先輩、仲間は全員男性という環境に戸惑うこともありましたが、日本と米国で4年半の訓練を受け、2006年4月より4人目の女性パイロットとして、国際線に乗務しています。

在学中や訓練中は自分の夢に向かって突き進む毎日で、「Mastery for Service」の意味を考える機会はほとんどなかったのですが、社会に出て数年経ち、ようやくその意味が少しずつ見えてきたように思います。

フライト中私達は、壁一面の機械とスイッチが並ぶコクピットに閉じこもり、お客様の前に姿を現すことはありません。だからこそ、求められるのは専門知識や職人技ではなく、常にお客様の視点で判断、行動できるという「Mastery for Service」。飛行機が一番前に、後ろ向きに座っているような感覚です。

母校で教わったこの精神を、これからの人生に更に活かしていきたいと思えます。

活字文化継承者の

一員として

作家

末浦 広海 (S 63大経)



このたび、第54回江戸川乱歩賞を受賞し、「訣別の森」を刊行いたしました。作家としてスタートすることになりましたので、今後ともよろしくお願いいたします。

現在、インターネットの普及や映像文化の発展により、活字離れが進んでいます。これを世の趨勢と言ってしまうと、それまででしょう。確かに、膨大な量の情報を即座に検索できるインターネットや、視聴覚に直接訴えかけてくる映像文化などに比べれば、新聞や雑誌、書籍などの活字文化は分が悪いと思います。紙面上の活字を追い、頭の中で文章を咀嚼して文意を汲み取り、そして何らかの価値を自分自身で見出す——それなりの時間もかかりますし、なかなか面倒な作業かもしれませぬ。めまぐるしく変化しつづける現代において、活字文化が敬遠されがちなのも理解できます。

しかし世の中には、活字でなければ表現し得ないもの、理解し得ないものが必ずや存在します。私自身、活字の世界から感銘を受け、精神的に大きな影響を受けた経験が多々あります。これが活字文化の醍醐味かもしれませぬ。

作家である私、末浦広海にとっての「Mastery for Service」とは、この活字文化の継承に少しでも寄与することにある、と考えています。この想いを胸に、今後も研鑽を続けて参ります。

人との絆

中原中也記念館

館長 福田 百合子 (S 37院日文)



山口市出身の詩人中原中也を顕賞する「中原中也記念館」に勤務しています。全国各地からの来館者を迎える度に、人々とのつながり、ご縁の有難さ、不思議さを感じることの多い毎日です。

特に、グリーンクラブ来山の際、わざわざ記念館前庭で数曲ご披露いただきました。町筋の皆さんも歌声に魅かれ多数集まって下さり、思いがけない交流の場が持て、大感激でした。また、ゼミ旅行などで、若い後輩たちが来館、声をかけて下さるのは、本当に頼もしく、嬉しい限りです。此の度、秋の叙勲で瑞宝中級賞を受章の折も早速に祝電・お花をいただきました。

先日来、中也と、フランスの詩人、ランボーとの関わりで、パリと、更に北の町、シャルルヴィル・メジエール市に行ってきました。ランボー記念館と、パリの日本文化会館でのイベントを通じて、国際的な絆を深めてきたところです。言葉や文化の違いはありますが心の通じ合う素晴らしい出会いの時を持つことが出来ました。折しもクリスマス直前のシャンゼリゼ大通りは、青い「日本の灯」(発光ダイオード)のイルミネーションに飾られ、美しくも懐かしい彩りに包まれていました。寒々も吹き飛んでしまう思いでした。

リスナーがナビゲーター

株式会社毎日放送

報道局長 熊 和子 (S50大文)



放送をめぐる環境が激変しようとしています。ひとつはテレビのデジタル化。2011年7月24日をもって現在のアナログ放送が終了する予定です。ひとつは放送内容に対しての視聴者の厳しい声。BPO（放送倫理・番組向上機構）には2007年度、過去最多の約1万7千件の意見が寄せられました。そして、通信分野の拡大。これに経済不況が重なり、放送界はかつてない厳しい局面に立たされています。

しかし、このような時代だからこそ、放送局に求められていることをしっかりと受け止めるべきなのでしょう。阪神・淡路大震災の時、私はラジオ報道において被災地・被災者に向けた放送を続けていました。未曾有の大災害に直面し、なす術もない状態の我々にとって、ナビゲーターはリスナーでした。どんな情報が必要か、どんな言葉が必要か、そしてどんな音楽が必要か。多くのことをリスナーから教えていただきました。そこに放送のひとつの原点がありました。

そんな経験を重ねて、大学時代よりもっと自分の問題として受け止めているのが「Mastery for Service」という言葉です。放送局に求められていること、放送に携わる者に求められていることは、まさに「Mastery for Service」の精神ではないでしょうか。時代は厳しいですが、数値では測れないものを大切にしながら、放送という世界で、もう少し頑張ってみようと思っています。

ゴルフ普及への貢献を

株式会社ターゲットパートナー

代表取締役 大西 久光 (S34大商)



昭和30年、商学部に入學と同時に父の強い勧めでゴルフ部に入部することになった。ゴルフ部は丁度その年に同好会から運動部に昇格したばかりだった。4年の時にキャプテンを務めさせていただいたお蔭で、ゴルフボールの生産を始めたばかりの日本ダンロップ・大橋貞吉先輩から入社のお話をいただいた。

昭和34年7月、ボール販売のために東京事務所に赴任した私は初仕事としてカナダカップ優勝の中村寅吉プロを日参した。当時、プロゴルファーは欧米製のクラブやボールを使っており、国産品の品質には信用がなかった。寅さんにボールの使用をお願いし続けたところ、3ヶ月ほどで試合に使ってくれるようになった。その後、寅さんの影響力でほとんどのプロが国産の「ダンロップ65」を使うようになりそれがトップアマに広がっていった。お蔭でマーケットシェアは80%を超え、生産は間に合わず、私はセールスをする必要がなくなった。そのころ自動車タイヤの業績不振で日本ダンロップは住友グループに買収された。その住友の企業精神に「企業は社会のためにあれ」があり、その影響も受けた私はゴルフ界を広げることに邁進することになる。第二の寅さんを育てるためのプロトナメントの開発、TV中継での解説を経て、今も「ゴルフの活性化」を願っている。ゴルフ関連協会での活動を続けている。

豊かなライフスタイル

株式会社洋菓子ヒロタ

代表取締役社長 広野 道子 (S60大文)



神戸・元町を発祥の地とする「洋菓子のヒロタ」を引き継いでから、すでに6年目となります。現在は東京に住んでいます。1980年代の前半に阪神間の美しい街並みに住み、上ヶ原のキャンパスに通っていたことは、いままも私自身のライフスタイルに深く影響を与えています。

おしゃれな洋館カフェや、ケーキ屋さん、住宅街のレストラン、高級食品を扱ういかりスーパーなど、日本中でこの場所が一番豊かさを感じるすばらしい街だと、いままも思っています。

1924年に創業したシュークリームのヒロタは、戦前から戦後を通じて、神戸や大阪で多くの皆様に育てられて、現在85年目を迎えています。民事再生から6年が経ち、無事再生が終わったとおもったら、また自主回収を経験したりと、さまざまな困難をいままでも乗り越えてきました。これからも100年にむけて、さらに人々に親しまれて愛される「ヒロタ」に成長できるように、「Mastery for Service」の精神で、挑戦し続けていきます。

学び続ける人生

京菓子司「末富」(明治26年創業)

三代目主人 山口 富蔵 (S35大経)



「Mastery for Service」ということは、私にとっては「毎日が勉強」「すべての事が我が勉強」であると考えています。

卒業後、家業である「京菓子司」の仕事に入り、父のもとで

家業を勉強し、そして家業を継承して40年。これまでの毎日が勉強でありました。お客様をはじめとして多くのいろいろな方から教えていただくこと。直接には関係のない方々からも学ぶこと。仕事以外のことことから体得する多くの事。立ち居振る舞いから本当の常識。また専門的なこと。趣味的なことなど。人として考えられるすべてのことを、多くの人たちから学び取り、自分の身につけることができました。しかし、これらが完全なものはいえず、今もなお、多くの方々から接して教えられること学び取ることばかりの日々の暮らしです。人生の最後の最後まで多くの人々に接することの大切さを知るばかりです。そして皆様のおかげで自分が身につけたものを仕事で役に立て、多くの人々に喜びと満足を得ていただけよう、精いっぱいこの努力を惜しまず、これからも生きてゆくことです。

明治維新(大阪会議)の舞台

料亭「花外楼」

社長 徳光 孝信 (S52大経)



天保年間に創業した当社の家訓は、ただひとつ誠実ということである。商いの町大阪では何よりも信用を重んじ、商人たちは、人格を磨き、徳を高めることに努めながら誠実に家業に勤しんだものである。人とのふれあいが希薄になってきた現代社会において、当社は古いかもしれないが、手作りで心をこめてお客様に接することを常に心がけている。

本来自分勝手な人間にとって、人に仕え、献身的に尽くすことは並大抵の事ではない。お客様、また従業員のひとりひとりとハートで接することによって手作りの良さを生み出さねばならない。そのために少しでも自分を磨いていきたいと常に思っ

ている。そしてこの事が自分の仕事にとって一番大切な事だと考えている。心が伴わなければ料理もサービスも全く意味がない。「Mastery for Service」とはまさに、自分にとっての日々の生活や仕事をする上での意味深い教えであり、すばらしいモットーだと、卒業生として誇りに思う。

商いの町大阪の船場で生まれ育ち、日々多くの方々と接して仕事をしていく中で、常にいつの時代にあってもこの教えを守りながら謙虚に生きていく事を心掛けたいと思っている。

絵を描く日々

洋画家 新制作協会会員

石阪 春生 (S26大経)



昭和26年、私は関西学院の大学の予科から経済学部を卒業しました。その間、絵を描くことが好きで弦月会に部員として楽しんだ思い出があります。

考えてみれば、好きで絵を描いているうちに、知らぬ間に洋画家として、日々絵を描く暮しになっておりました。小磯良平先生に教えをうけ、新制作協会で育てられたわけです。

母校の関学とは、今でもご縁があります。グリーンクラブのポスター、プログラムの絵は20年余り、私の作品をつかっていたいております。関学の文芸部のOBで編集されている、別冊作品は資料館、同窓会館等、数点学院に収納していただいていることはうれしいことです。

一昨年、神戸市に作品を五十点寄附させていただき、その記念展を小磯美術館で開催していただきました。その時、私は丁度喜

寿を迎えており、いい回顧展になり、二ヶ月間多くの方々にご覧いただいたことは、まさに画家冥利につきると思えました。

きっかけは軽音楽部

ジャズヴォーカリスト

原田 紀子 (中平) (S39大文)



先日久しぶりにある会で同窓生と会いました。彼女はご主人の影響もあって大のジャズ・ファン。私の軽音楽部での現役初の宝塚大劇場での「定期コンサート」の出来事をよく憶えていてくれました。当時、一年生の私はコーラスでの登場でしたが、ソロのパートを歌ったとき会場からどよめきが上がったそうです。それは私の声がジャズ向きで、他の方とはかなり変わっていたからとのことでした。

そんな軽音楽部での活動をきっかけに、現在も歌い続けておりますが、2006年には戦後間もなくスタートした部が60周年を迎えるというところで、かつて大ブームを起こした「懐かしのジャズ・コンサート」の再現と「関学軽音60年」という部史を、いずれもOB・OG、現役の皆さんの協力で作ることをできました。現在は残念ながら音楽の多様化でかつてほどの勢いはありませんが、軽音楽こそいつの時代でも、また何歳になっても付き合える音楽だと考えます。

最近うれしいことにかつてのメンバーが復活して楽器を再び手にしたり、コーラス再結成の動きも出てきました。私も歌を歌うときは、いつも学生のとときの気持ちがよくあがってきます。音楽は永遠なり。きっと学生時代に培った校風が私にこれからも現役で活躍できるパワーを与えてくれることでしょう。

ババア(婆)ボランティア (シニアボランティア)

「ナマステの会」

主宰 岩坂 仍子(旧姓廣瀬) (S36大文)



2008年10月に新体制になった独立行政法人国際協力機構(JICA)のODAの4本柱の一つにボランティア事業があります。その一部に海外青年協力隊とシニアボランティア(SV)があり途上国への技術協力と国民参加事業を目指しております。私は2004年10月からパラグアイへ2年間、2007年8月から10ヶ月ブータンへ両国から日本文化の指導という要請でSVとして赴任いたしました。基本的に現地の言語で指導して赴任期間終了時に相手国のカウンターパートに技術移転をするのを目的としています。

SVは長年培った実力と経験で役に立ちたいと勢い込んで乗り込むのですが実際は途上国の生活環境、文化、生産技術などのありようは先進国とされている日本とは別物で、日本の常識や価値観は全く通用しない別世界ですし、更に現地語による指導にはほとんど困りました。どの国にもそれぞれに培った文化の歴史がありそこに踏み込んで日本の価値観を押し付けるわけにはまいりません。が改めて観光旅行では得られない体験、そこで生活する事によって知りえた庶民の暖かい眼差し、国が違ふと同じ物差しで計ることが出来ないという事の再認識、外から見えてくる日本国についてなど、ボランティアをしていく筈が頂いた物のほうが多い体験をいたしました。

学生諸君や定年後の仕事を考えておられる同窓の皆様の一つの進路として頭の隅においていただいたら幸いです。

今も続く道

JOCSS

バン格拉デシユ派遣ワーカー

医師 宮川 眞一 (S60大神)



今から27年前、神学部在学中に訪れたバン格拉デシユは、私の人生を大きく変えました。当時、独立して10年あまり、ジョージ・ハリソンの難民救済コンサートなどで御記憶の方もおられるでしょう。その1ヵ月半の滞在の間に感じたものは、構造的貧困に対する絶望と「技術を持たぬ物」の無力感でした。

関学卒業後、目指した医師への道は、まことにMastery for Serviceへの道と考えております。現在、念願叶ってJOCSS(日本キリスト教海外医療協力会)から派遣され、この国のチャンドラゴーナという町で働いていますが、その道は、今も続いています。

任地は、イスラム教国バン格拉デシユの中でも少数民族が多く住み、医療過疎の激しい特殊な地域です。そこで、日々の病院診療に加え、外に向けたマラリア対策を含む地域医療に取り組んでいます。

08年秋、1期目の任期を終了し、一時帰国。関学中高大を含め、全国で報告会を開催しています。各地で、様々な分野で活躍中の同窓生と出会う機会がありました。同じモットーの下に学んだ方々から送られる祈りと支援は、以心伝心、活動継続への大きな支えとなっています。

「Mastery for Service」がJOCSSのモットー「共に生きる」ための基礎であると確信しつつ、2期目の活動に入りたいと思います。

「Mastery for Service」 を座右の銘に

学校法人九州学院

小手川 勲 (S51大文)



若き日に病気で入院を繰り返して、小学校に7年、中学校に5年、高校に4年も籍を置き、縁あって22歳で関西学院大学の門をくぐった。家庭教師・塾をはじめ、さまざまなアルバイトをしながらESS、ゼミや下宿の仲間とも親交を深め、一生の中で最も充実した日々を上ヶ原で過ごした。そして彼らとの友情は今も続いている。

卒業と同時に母校九州学院に英語教師として招かれて故郷熊本に帰った。以来32年間ずっと健康に恵まれ、病欠を一日もしていないことが密かな自慢だ。私生活では教師一年目に結婚、一男一女をもうけ昨年初孫も生まれた。

関学同窓会熊本支部の中でも多くの先輩や後輩に支えられて来た。KGM C (関学モーニングサービス) と銘打って始めた月一回のホテルでの朝食会も、今年の6月で満10年になる。1949年に設立された熊本支部は私と同じ歳で、今年60周年の還暦を迎える。

その記念と、合わせて地球環境への貢献、母校関西学院と同窓会熊本支部の隆盛を願い熊本市近郊に「くまもと関学の森」を整備し、この春に植樹が計画されている。

関学卒業以来あつという間の歳月に思えるし、ここまで何とかつがないう人生を何とか過ごせたことはありがたいことである。その間「Mastery for Service」という言葉がいつも心のどこかにおいて自分を奮い立たせてくれたし、何故か今でも「関学」と聴くだけで心が躍る。素晴らしき母校の教えに感謝し、はるか九州の地から関学の発展を祈る日々である。

生き様を学んだ キャンパス

奈良県御所市長 東川 裕 (S60大法)



奈良県の片田舎で、幼友たちとワンバクを繰り返していた私にとって、高等部入学と同時に感じた都会的でハイセンスな学院の雰囲気は、大きなカルチャーショックでした。毎朝6時前に家を出て午後10時頃に帰宅していた高等部時代、アメリカンフットボール一色だった大学時代。私は関西学院で、自分の人生の根幹となる「生き様」「感性」といったものを学んだと思っています。特に大学時代のコーチが常に口にされていたのは「Pride」という言葉です。「Pride」という言葉と建学の精神である「Mastery for Service」という言葉がそのまま、市長選挙に出馬する志となりました。

昨年6月に市長に就任しましたが、全国でも有数の財政難を抱え、市長になってすぐに財政非常事態宣言を発し、財政再建に殆どのエネルギーを消費する毎日です。全国の自治体、企業もそうであるように、ここ数年が大きな山場になるでしょう。いろんなシステムが制度疲労を来し、全てにおいて改革が求められています。この危機をチャンスと捉え、行政経験がない事を武器に、大きな改革にチャレンジしようと思っています。夢と誇りを忘れる事なく、関西学院で培った「生き様」と「感性」に恥じることなく……。